繡像
復讐
岩見英雄録
四輯
三

遠
2509
35-24

遠
2509
35-24

繪本復讐英雄録四編卷之三

秀明雅裝壮友を傷ふ
光能絶技衆歓を拉ぐ

張匹の義賢ぬしの羅臣なる
紹弟獺復仇く木霜庵漢作

建部源八郎秀明い壮年なれども武士道に遅き勇士なり
伊藤直衛紹が親なるの城下に一月ばかり来て寓せ
藩臣の子弟に武術を教ゆること、年に二次の例をなぎ
ぬ時候い衝紹を屬く傷つまさ傷が家も清し
親しき人途屬直が御廏よりなれを居る上に次ぎ少なれい稍
勅仕の際ある紹りてを義賢ぬしにひそかに清南
て他うばり師弟と斉しき吏宦なるまびそを病を同慰めん

伴可を脱ぬ被ぬ被ぬ間を坂東へ音耗地さ
伴商も着そて僅ゑ十数名を具し六月九日の黄昏ゑ
らぬ名ゑ神奈川の川原なる水流まで来ゑ遠船より
堀田の浦へい船面漕く快所除りゑ上さんで夜日の間ふ
うち涼り久吹の涼しゑ夜川ゑ来て宿り「わどゑ
賀日をまぐ原鞘もゑざゑ伴義が富所ゑ知りゑゑ「出
ゑりい伴義い脳を種らうに出て打ゑゑい餐義もまく
気を盃ゑり貴之而海縁を赤城天山横尾名七名が対
来ゑ門生名と試撃のと及び村松清吏が来ゑ流せ
浜流抽松荘を剛がとまく村松と高義して今日被抽
松と赤城名と試撃ゑ流せん紀斗を生ゑく建部隠八

ゑ流永ゑゑで丈い気も抜ゑ人ゑ抽横ゑゑ
名り会ゑ一条も本ゑ上ゑ優劣一流のゑ人りの
抽松と中ゑんを生ゑ推挙あゑん日い被の御前い条
ゑ紀ゑ組濁付ゑん名ゑぐその準備を怪しゑとゑれば
淋緑ゑて既ゑ抽松ゑ今紀村松又ゑ伴い名り流
ふ名ゑ対面して先ゑ流亨に留ゑゑまく赤城ふ
ゑ代坂本の家ゑゑり部今抽ゑ家いゑんとゑ役
ゑぞ生ゑゑゑ先ん抜抜ふ赤城名い午の唄吹ゑ及ゑ伴義
が使の来ゑ使ゑゑぞ待ゑ名ゑゑゑ人ゑ伴い
来りゑ家門ゑ使せ和門の例ゑる編戸ゑ抽ゑゑ上ゑ
本日ゑ晨ゑゑ天ゑく流りゑゑ人ゑ強風涼ゑく吹ゑて

涼しさ扶を敷くぞうなるまい正廳の空庭を徒歩
の嬉と変めさ与渕縁より門人を使として新婚者と後
亭に色」柱松へも告ぎるに大家矣後ろ〳〵諸へ〳〵
清廉よ正廳へ出て初る中央又建部源八郎秀明征裝
せ一旅袴のまく簷廊途く庭よ弓び伊及直渕縁い斑
白の四方髮病弱の仮腹ちつちづよ早袴の襞縫正しく
左のうさに坐と占めまさ剥松も佐く本家の作用人よ擬
らましのかれい義義樹又よる麻衣の紋と作る
移く手本相よ作りうるその作直ぐ門生弓い廣掘平
うるんて居弓び立ち庭の中東面の嬉際なる柱義の
木義よ草席表牧り浦没けく双方射歓の作の憩而

とせうかどもわく亘ぐ高弓重月十四三名藤義人そうれ四乙三
天名子丈舎ふ列り未塀名ると等ると中門より庭とろり
未塀名庭上の鞠とうちスゆり建部源八秀明の名い
ら松ども六角の羅陀ゆうを家うに蹴と求むるんけう
一高庭ふ立ぐう改と作つ初ん出ん孔雀とよく松
上月三名藤細信うて若しかぐび那方い西びのうる
まぐび兵庫無うりへと西の嬉渕へ体ふ狂ふ綾と加め出
うるるも似げるさ魂態ふ侍痛く秀明ハ渕縁ちた
長鞭ちるのう信ぞ又長橋潮ち弟平野田郎安斗彼ち
勾へ浪亭ちう柱松と体ふくにぐく中門より入て侍
憩而ふ体へうそ東西ちふ副ち手席ちぐ端居せう

堂摩より山本源して丸へねどよ和尉る憩和よ拍くる
は方へ為く七名の歌よいそれと待せ〜に遠いざりれと
踏ら絶ど未塙稲尾いりも更あり天山蘆石完を名る七
名暗ふ和鶯るき科らざりき樅松荘を露と胡日宮くる
武者陸行へ彼奴よて思しよるる紀平よて我们が嗚
して剣さ人孤者人賜しと寸日一夜儀るより凄〜き
風ふ為くも濡きそがらる慨そば今日で晴さん絢
の雲臓も獨も打んとうちあやまして思ひ初うせん又
も利彼奴ゲにかしろく変を行うそひせ〜あどく
いい〜ものへ拙せる加乗もあさ道嬉るうんと甲乙
ふ目敵しんよ麻とのをふ為ふ時て接きて慢れて

東西神〜く意の西中へ立出る樅松荘を陽光紀の乗
日の打拍獨色よ三巴の花歸を深除〜る麻衣ふ淺
縹なる獲行を獨揚りよ穿左〜る列陸の方へ一撫の気
も殺よ敬ど紡ら登附西の方よりい蘆石ふ命を三つ盤
を屬材松茂樹よ永る敗ふ筍よまて樅松よたやもも
まうさん〜まる祇を清めんと吃と立財ふく初うぬ体
に名獨〜る為敬の桃〜ま木刃の作うの弓も仁ゆるさぬ
戦の場よ神〜き大乗の晴業為三合稼よと日へう祇
ら色の名ら〜も仙ぞや傾よ駿休ら見平拗珠の遠
ぬぐりふ巨く沿へ祇で出さる穴を の撥し悪湾有ふ乗
を樅松ろまよと二間ふ紙の弓号撥金よも疾く獲

演武懸引
荘兵湯
房人を
殺るの図

強なりとも判要んと突来るを左なれば右なれ
受入んとすれ一上一下挑合あるを光能が技も膂力も
勝れる希なる勇士の際先南へくも抱ざれば衡を捨法
こそ徒物の虚撞を撥止と拂へば拳をとるまて完たが
天小勢き捨夫の半空をくる反揚らまに周章驚く満有ハ
言葉を忘れ呼きて引よろ同もあるきに入代る暴徒
三六羌い歓の疲まを撃んとて蜀の さとも粧豪
亀もなく十余合も撃合ふ子更右刀小味まで丈へ
雖う張さと所而ま見まぬ金若茂幸ころ情ろ情若
芝人地ごり生さう横さ女の曲剣ろでは撃の功を貪る面
貌を完布と笑ひ一撞松莊ろ衡左右ま更ろ支歓を撓

まぐ去ぬ徒物情く加りて撃合ふる三口の本力丁く
と答るもろく光能を呼と変りけく今若が本力とち
落せべ左右四も逃ざ花入ぐ組んとする代左ま小猫
陣門つくをむ園野が狗元へ撲他と投る力さ人ぬも
恐しき剽捷ふ体右ろ人ぬもの全身病をて起雄る
と成のろ左角十人言名陣義へ立ろて投けくうのさ
へ行移ま今ハ天山双呂布横尾豎ねと未陽るの猫の三和の
こそ狩りる抱べ言ぬよう産摩ふ有ろ建郷秀明
伊義陣種村松又ろいのも文ろり掘側と産ふ裏ひ
佐人も光能が本事ふ希く言代仕んふ鶏漢せぬもの者
中ろも亘陣種ハ清左文義義と何の偽ふて掘側ふ文

出極松を拾ひそつまみのうん一宴時体くひめくと蒼に
芳ふ荘を席もそへ芳時みれりへども敵まの寿ふ絡
婦ゝくへもりんふ系もまぐ拾ひうう疲まと考へね
べ若ゝくもりらびと考て敵を絡つ絡雪へもつきき
勇士の和性村松を感ゝるぐうも否極松の大人伊為氏
も病脚の長ゆへ国ぜゝきぬ是ゝ担て隠通ふ沈あと
ゝ絡ふ平野田帝安斗絡を佐を河ょ光然へ
たも右もて想ふへ逃けべ建弟沈八秀相へ直ふ向ひ
くゆ光もいゆぐ痛新の地さんふ分きゝ体見行
きて敵むるふ晴へ国ゝ村妻又ふ互代りょ清りのうう
沈絡も系ふ沈ゆ疲りゝへ今日へ拾文脳きゝくへ

あゝよども寡財芳考ふ法ちんと仮家ょ直りて休らゆ
ぞ考明へ長長樹名ると打沈ゝひて立るようむ有右
而絡ゝく沈絡へを侵者を足果んと心勇めるりのちれが
ゝゝび出く国庭ょ入まび偏ょりも英考と出ふ極松
考絡那方ょりへ天山双田帝を尋ゝく産へ出考ふ
ゝり名をへ大川重忠を嘱ゝ芳ょり部ふの名絡ゝ名を
沈ゝ極若赤城櫛尾ゝゝ七術ゝ芳りゝめ毫石穴を岡
那今谷ょへ遠ふ部ゝる本事を遠ょ形ゝて田名の
業の城摩を搖ゝを考んへ此一刀の中ょありと自ゝくものむ
血考の勇相服系ょ 頼骨ゝく痛ゝて巻ゝる松ょ絡
ゝる絡ょ毛の生ゝる身の長さへょ荘を働ょ考らび侵ぬ

一對の女歌ごとに或礼の彼方言のひとさや聞へ来るとは
るるに進げるや迅き人初めぬ下と撃合刀雪の一ちえ
ちく空をさきり見を試撃の初めて交てい西一れて
附入互に鎬の鍔を尽し戦ひ附を絡てまでは出とる撓
まぬ光鈍ぐ勢ひ寄ら鍔のごとく向つまおろさ一人高ふ言
を見ちんどの歌ぜんや御眼まどろこ瞬きて隻猿打ち法く
有撃の癖漢柱れ双御蘿んと内を木刀をふく跳り
新陶の仏若しくも法り
南風に形痛を病を許なり

書を書して櫓尾巧ふ病ふ託を
渦を点て柱れ生に別を伝く
却説赤城を猿河廣い鎧ちと坊へうる天山双四が甲壁
なくも敗を死しに柱れが武芸力量実に凡庸の歌に
なんぞと知に共し鬼脂ろ死ちいあるひども系来偏い天山に
倍一倍ちる芸へある大猿未歌の猿雄なるに性能で猿悪
ちまび鍋ちうも駒に海ちる横り燥急ちちを押静めを柄
で捷利多ちうと投て出る好呆検ちを入碧り立剪ひ
しが側ふ向て表四ち静ふ堂中減ち素実の程やちうえん
足蹈直し忽に呼と変ちけく突出て見ぶも忍をぬ疾
検先を沉て直し跳て抜し九丑と右色へ撃掛ふてい入ん

と云ふる光秋が形体は細ぎる骨柔の拳動玉風花を吹び
拋擲花秋雲月を吐て蝙蝠蟲の精妙微妙の刀法は竟
髮の冥もあるべきに烈しき閃電の捲い雷しくなる
云ふ陽頁の色は見へざれば赤城一世の勇を奮ひ
云ふる数刻の闘戦互に蕨塊に入るゝ〜みまで抜松が本
車や絡に優りえん地と遣て撃やどよる搖ぐ捲雷こ
尺泥斯ふる如く水打ふく形方へ内一内と敵よる時しも
親と一渡り面を撲て田湖の沙を捲て立徳まべいさるる
夫れ財産も服を開えんとしもなく程稼中ふ忽然として
云の色墨より黒く除来る大雨迅こと宛然蒙のごや
なるに庭席に坐〜人〜いと強ぎ麓を下戸を閉ん

庭ふるい雨と遊んとおひくふ走り紛く車の絡完ふ赤
城と抽別ませ〜抜松い長橋平野安井名〜名〜しく雨に
泥濘なぐら体ふく浸なる亭〜都市ば横尾堅和赤城
ふ猪天山双目前金谷完寺屋石器野名い姫ふ和〜
ふ金〜潮く左ふ〜ふ雨ふ裏の日の癖ふ長い序鳴ふ絡ふ
雨際歌ふく雲ふより潮天の青紙見ふぐふ〜ぐ敬ぬ
潮縄い建邦海八ふ見ふ区の酒礁を没け赤体ふ村松清
麦文ふと絡ふ雨を凍して重を巡ら
つふ人伊義と村松ふひ音ハいふ見〜ふや彼抜
松荘ふ衛の幸幸い麦ふ今の世ふ名ふ海ふ元着ふ
て村松氏の恵蓋ふ〜ぬい結く人を徴の昭鑒なふまと

村伝蔵蔵
おさん
侍女

父子一朝乃
生別離
何ぞ図ん
死別と
ちんとハ
蔵もや
とき七

意石完をうどゆく寄も庸者の技をいあらば天山双日う
とゆしい最揚まて見へめまどは極松をいの及ぶべくとる
をいを揚頁をて英し組赤塀いを蓋小競倫絶おを
刃へ法をを面師風伯の教風家を閉ひまみして雄雄を攻
ををを及でぐりしいを憾なり歩ぐごをいを蓋の心術
こを恵をねを技い勝むべし結び横尾監物をうの奉幸
も必らで鈍つぐを有をみをなをんとをを亘いを海寒り
然なり赤塀極松不意試撃を止めまどを優者い流小
粗刃へてをと差をる河を続ける義差を紙わを霰の
風面を刃ぐる弗の名なり 明年をつをい泳を赤塀が天幸をいをんなを
打ををしをうち渝絶い弟子を蓋人を以て長橋衆を弟

平野四郎弟を向ひ足下童い後の亭を酒をおして極
松氏を骨待をべしと差景しつ又金月十を吉を清美人
を多い子舎小列を紙七人を童ををめらまをを度を
紀をべ建部源八を義を向ひ赤塀横尾の一騒い結をを
ををん極松を一人とひ村松氏の客とあまべいと仏
意臣秀明もかる豪傑と霧を對面の舘いしを苦
しうべは席へ拓をせかへみを結べ厨丁の給接も畧て
冠をべしとをを伴義村松も舘小を橋
をを意を得 せ極松を拓をしむ結べ荘を閑を紙を
、の亭へをく強く進絶しを来り紙裏と解て面小
渥をる衣を抜を休をひ居をを渝を所鑑衆四所言

岑雲師の海經と村松義ゞ河を渡りて伊勢へ
とゝろよ由なく客室へ出来まべうと客間乗伺まして婚儀
のに程あり御く席を定まるまべ建部秀明懇勤よ御り
新しく試むるい六角家へ光秀を使へさせんとせんどかよ世ひ
をなるべし扨も主家お濃りく城様も既よ結局よ及
びしよ暴風よて庭の中御跟滑りて仮り兎し幾ばくて
まゞ申譯もなどゝよ果さで止んも本意ゝ及び高人の恨
合んこいサし常えど田ひなる濃武場ゝやさべうんと
こち濃ゝ申へ左月すよ沈林寺高義人明兎臣
く出来り只今介門の傳ゝるゝ金盤を齎し来り
して彼一殺の武若殿ゝ何地へ行しや一人もなく此一通

の書をさして捜ん とて扨おを海經ゝく是を濃よ
横尾彩城赤塚時廣を神よ七名の連署ゝて今日の管
約を謝し扨横尾堅物卒ゝ狗痛の患ありて仮神悩こ
ゝ程よ植村氏とよを接へ雖く主猪ゝそこ家あの試合
を果ゝ武ゝも吉藏ふゝ人ゝども大賓来臨の打揚よ家
を始ゝしゝんを呼り一殺の書簡亨へ色ゝ心安く療
家看護ゝる付りいしゝ植村氏へも旦江門生家ゝ家く
繁接感謝ゝ堅ゝよ行程ありるべくたのこまつゝの医
うまべ海經ゝ書と秀明及び光秀義ゝも賜して那
業変て楽頁しを祐擴りて彩卒ゝ病ゝ託けゝりしゝ
仮ゝまゝを帯りへ使して濃せんとて急ぎ一夫人の門生

ふ僕をはじめ一族の徳奥を尊ーぶりよそこのわれば
村松の家全くよろこびなくなりぬ世人ども仰ぎ
仰りて彩と波えれば伊義いさ世人ども讃ぶ
彼義いくく敵くさーろれとぞ世のいろり有ぶ面相光
知い村松文子信光と主人伊義と建紀秀明ふ義別て
仰ーんとすると秀明御經今時ー御りの人と抑ぶひに
光紀義へて素のそうべ若ーくまいそども義と及ん
で仰りいろんふ若りの七人の義百ふ一系を要と懐りうべ
路涙ふてふ虞のことあるんふ村松氏父子の人ふを始ふに
べくいろんを義べ呂今の家ふ仰りうべ紀安くいとふ
秀明御經も実ふ程なる意を意ろんに仰ふの本来い百文

ふ面と笑ゆるふ絶ふ知ろうぶ危ふ知ろうぶ知ろうぬ義
文の大勇後家の感懐ふて高ーく感じて泣てい
とろぬものうふ光紀ろ義義樹ふ使ふく後意へ
邑ろて仰る淮海をろるふ左ん行べ建紀秀明い松村と
推挙い加傷彼　村松清三郎義樹ぶ温潤ろて沈勇
なる義義の英丹ふ知ろうべ呂武若殿行の一人なふ
義石ふ鑑ふ打捷ー本事をる空めまべ涙くろろふ
見ーふろうべ義ろうべ義樹ふも義奥紀信ふ稟ふ
めん義ふべ我兄大義丹補義秀浜ふ高量ふん義義
樹と門接ふべ仮亜恵ーと世ひふろんでいるを御望ふ
お優つく意ぶ清方文義義を尚の序へ抜ふよせ秀明

先ゝ新りゆうの村松生茂り鍛より賜はるの日ゝ好沼
あまべ毒的白い遠里を發程て沼ふ郡くべてゝ新へ
ふ息を休そんと歌を遠見地松生とゝ茂りい清きゝ
を候へ時をいて陸ゝ岸へ棄ゝ茂に大義い宮殿に夢拳
きべ仮宮ゝ有衣へふ息をして大義ゝ引搖せ茂が
活徒の保徴として高堂きん旦い路ゝ〳〵の河歌を歌
えんで寸旬ゝ〳〵偽作ん和及いまゝ地松を留て私ゝ
鍛へ住宅を遠漁ゝ〳〵べ〳〵九右い伊義大人と深〳〵ゝ
岸ゆゝ渉經も河を絶て茂い御疾て建新大人と送り
まゝんを雖ゝ偽令息を〳〵ゝ息者が代りゝて新書
寺まで大人を見送ゝせゝ〳〵ゝ故る和ゝゝんゝいふ義

義いゝで言はべゝ不肖の拙命ゝ〳〵ゝ稱へ路次具〳〵ゝ
ゝい至ゝ幸ゝゝく新て偽へべ茂明至ひて丈い茂ゝ
く脱ゝ〳〵ん強りゝも地松へいふ息の赤紅い唯茂を送
ゝのゝの由ふ岸へゝへゝと若茂〳〵熟淡果ゝく義落いその度を
長ゝて淡亨ゝ行居〳〵光新義樹て高〳〵出ゝ門ゝ至ゝべ
直い玄関ゝ見送りて弟子ゝ〳〵ゝ言ゝゝ〳〵門のゝを〳〵く
光新を茂〳〵ゝゝゝゝゝ出ゝ稽沈ゝ茂ゝ
平新曰新ゝ高ゝ義人を初め年日集ゝ来ゝる壮士ゝ
十余名地のく地松が武義の精妙ゝん稽を〳〵ゝものゝ
淡ゝ跡て茂町ゝ送ゝを地松ゝ村松ゝ茂ゝ〳〵ゝ帯ゝ〳〵ゝ
ゝゝゝゝ淡ゝて弟ゝ〳〵ゝ伊義が荘宅ゝ〳〵ゝ

もて傳ゝられて偏ゞ栖宿所へ急ぐよ急うりき扨も村松
又子い光教ゝ倶して幸勝の宿所よ向り今日返おりて
の光幸と長江よ向りゆへて支度教子の光教をもて
なし　初よ活潑ゝり遠教清左衛門長江と義樹を傳
をく呼て建教源八と伊義夏よ給しめるゆゑ後藤
黒日義樹ゞ旅行の準備をくゝ湖ひめきゞ光教ゝい建
教秀明と美るゝ為め清三郎と若又宮めて明日い
子義ゝ出べゝれで今教い伊義先生の宿所よ止宿りて生
ゝて要なきと滑稽せく義樹よ演七を誡て供ゝよ義
樹い父母よ若別つ出んときゞ伊とゝく父よ解決の場
まきて稟までもゝひど急くいあゝ如偏ゞ今教の注意を

急くい日を待めゝなゝゝ活潑のうへの開如よい左きあつ
さの時候い一入よ秋夕の風よも解でゝ冷をも覚らせゆ〔ゝ〕と
云い果ても踏躇て行よひゝく子心を母い強くて推辞る
為くゝゝきく喃清三郎ゞ節度のうへい音偏を初め果ゝも
傾傾行きゞ勇ゝゝき孝をゝゝもあき除ゝて國ハかゝゝ
ね暫ゝなゝゝも板宿の天食あゝも云を消暑ゝとて為
ゝ欲て中よ演七遠見ゝ上を遇むゝやと心弱ゝい母子
の情境ゝゝ義落も同ゝゝゝゝひよ情強ゝ志ある心を忍
ゝ変ゝ立て出ゝゝ永き決を速ゝゝ如ゝ長江ゝ同の
未練さよ伝も又父の令師の教をゝり」男児の本意ゝ
ゝる元猿も出べき才の云甲斐ゝあき乃よ日い開ゝゝ甲

伊藤門生

伊為豆門人
長江

狩園まいあく孫ども疾路い要なり迷行ぞ西と彼此なるよ
此らまて彼ばとぞろの親と子ば母めひ長者の山風吹差い
来る二丹吉の諸行参常をとる東も猪参如ろよと出行ぞと
国差る又と敵ろ子見と一世の別まとん知ろ如ぞ後の義まと
ろまと盤日彩ろよ十二日　秀明い村雲清二所とおて海經よ別
を告親寿吉の城下をさして切りろり有ろ西義差いひ
そろよ光彩よ彼く本家へ結度ろあいぞ申と同盛つ上伊
義澗經が偏ば代りよ勇士をいく鍛へをくめんぞ年来の
志とも語り出ろよ流し徳通ろよ光彩い義奨彩ろ武
畧よ強く英ろなるぞと吟つまどもろ人の屋ろく涙ろよ
ろと雖く国ぞろ且その志とよろこび附し系今結度

ふ屋ろ国より中ろ志ありとも来よ偽ひ雖ろその加ろ
途属七名の武吉陸彩行ば坂和へ来りしも伊義氏の情彩の
風吟を徳て来り上なんぞろよ大半い盛彩よ頁を見しを
愧てや知ろぞと　に何ろよ知ろ去ぬまどそ光弟ろ
清吉ば上彩ば今の弓い途さ四ろよ知ろ料ろべろ
ば吉と伊義氏との汲引して系ば六角家へ結しと吟めせば
彼ば定めて吉と伊義ろを怪と憤りなん見系ば禍を他ふ
嫁ろなり系本地よあるぞと吟ば来ろろべしろて
ふ吉く暫し彩ろよ新くべしば日い彼を分ろんのことろよ
地ぞろく清吉　其いまと大人の来ろ西て熊吉ろん
低令横彩ぬふとも地所ば河ろよ日数いあり上拉て来ろ八留

まりあへ給もうくべ彼も如を なくいそんいうぞくと清霜
ひまび光教い来もいつ四る 伊義成と一試撰をめいこれも きと
臓くん へば を御疾の全く 疾りて徒よ家あうんを 生く 方
よも一月いうとうりぐその 拭及ちあうくび遠里へ 来りいそん一
且をうよ京師の気を 御めいそんよ要事あうべ彼のる
雄屋を宮拝 消息あへ大丈夫の一云いうぞう信を失うべ
をと固く約して 留る 毎ふもあうざれで義蔭を力なく又
もや 山日 坂 へ都をて 彩と 滑 絶よ 遣り 遠らうよ 伊義も
実よ彼人の 辞も 理ううまびを 来うんよ 要いい
ぬび 雲 時を 言よ 法を へ 彼せん 術もあうべしと 高 量 絶 く
義蔭い 病 ば 富 所へ 帰りうる 明 自 村 松 を 光教が 入京のお

途と 拭 へ く 長 江 法 を 竭 し 絶 味 を 調 して 答 邑
法く 頻よ 伊 波 の 横 を 絶 変 四 とう く 巡 らを 立 の 果 うう 拭
うう 伊 義 ば 才 子 甲 乙 十 名 ぞ うう ふ く も は 生 を 少 出 れ で
ちうへ 来 りて 互 代 りよ 光 教 ば 立 を 乳 殺 よ 鳥 を 流 く ふ
義蔭 文 殺 伊 義 ば 門 生 ば 河 高 〜 〜 不 元 も 今 日 い 生 く 旅
ぬ 西 陸 望 日 早 天 よ 義 ぬ へ と 安 ま ど も 光 教 い 涙 を 持 て 貴 月
とう も 解 波 い 坂 ぐ 絶 せ る 長 さ 別 ま ち ぬ ま の を 牡 蠣 こ
うい 跡 ぐ て 美 ち び 富 ち ま 絶 ち う と 若 よ 岩 別 し て
度 を 乱 ん と ち う よ 義 蔭 い 長 江 よ 命 じ て 三 織 の 生 み と
家 よ の ち く 解 絶 と ち 門 生 を 及 び 偏 ば 芹 ち の 儘 な り と く

扨かゝる上は此の母等は僕を石塁にみづからを
遠島村松が人情いかゝ
本来は猿きゝのごとくで義侠の勇士と安堵せしを
よしや金を受るとも又受ずとも仏を撲り情を繋ぐん源蔵
が計らひかりさんとも光敬固く辞して素ゞ壁纏もいまだ
しらぬど暫く村松主は関り亜あるべし又孤猿は横し
牙の人と異なんも差ろうと見さへ否さて兵粮は差仕く
出行るる歌赤恥を猪時度横尾賢如新天山双巳
帰るを待い今谷左兵衛幸宗を恨く怨讐有及び長野
三六主を虚名あるを計を主を盤と去日伊義が宅のお金を
体らん〳〵附横尾新太郎村松荘を衛が武蔵中く容易

ふ捷雅〳〵と知るくれば病と称り左右ども法度を霧よりも
ぞき坂本の方金人も入らざる主日大津の歌を来り居り
洗を試験い人を打負赤恥をも唯体の勢ひ〳〵と極
松を使ひ来り若も命を新来へ溺る新平まて徳る男を
て報村松清三郎が父なりと歩つまで改て極松と名乗
新しての体を伊義が告く客意を思く云なるべ
れで西徐体く本島へ仕度の途いつゝりぬ強る上い極松
を周旋を教害して恨を撃て叔本国を立く〳〵喋
合をて五三疾甲斐の男い海を変て七人が孔のく袖を
嗜號の料を酒〳〵拭を三名を別を客金を出て妻海
と叔本の男どべ潜るべ居り〳〵が遠日七名大津の

歌にうる酒樽よやう避暑の磯り来てそく夕潮と遊る
蓋の下より破面より吹抜る風と交る打うち樽ヲとる一人の
武士い実確よ樽松ちんめりというむ七名鎧形合彼奴極
めく竜へよろく見ゆるよ日い狂もうく蓋ぬ〳〵お途ら
路の勢所なり一騒撃てそ尾ふうん七名森〳〵よを下
さべい阿陸羅なりとも成仏させんと酒肉の料よ遠く
乗りせて樽をとりつてもゆくも出る門の外眼を着て極
松ぐ脊彩と笑ぐと回香よ跡く行く完も尾を光粉が
吉向の厄いいうやわうん丈いまく嚴の老ふ流ん

繪本復讐英雄録四編巻之三終